

サーティにゃんアイスクリーム

やゆよ

「はあ、今日の売り上げも最下位でした」

とある街のとある小さくやアイス屋さん。ここでは今日も、私たちアイスは販売中です。

「そんなにやに落ちこまにやいでえ、可愛いお顔が溶けちゃうわあ、あずきちゃん」

彼女の名前は『ラブポーションサーティにゃん』ピンクに白にハートのチョコが目印の愛らしいフレーバー。お店の名前を背負ってるにゃんて、どれだけ期待されているのでしょうか。

「ラブにゃん、だけど私、ここに居られなくなっちゃうかもしれないです」

そして私が『小納言あずき』。ラブにゃんと比べにゃんて地味で目立たにゃい、私を買ってくれるのは近所のお爺さまお婆さまくらいです。

『一か月間、毎日違ったフレーバーのアイスクリームをお客様に楽しんでいただきたい』だから

『サーティにゃんアイスクリーム』という名前が付けられたのです。それなのに私ずっと売上最下位でただただみんなの足を引っ張っているだけにゃんです。私を作る分みんなにやを多く売った方が、お店ももつと儲かります。私はもうすぐ、メニューから

外されちゃうんです」

「ええ、あずきちゃんもレギュラーだし、大丈夫だと思うけどにゃあ。あつ、シュシュちゃん、シュシュちゃんもそう思うでしょお」

「つえ!? う、うんそうね!」

「やっぱいい、シュシュちゃんはエッチだあ」

「ちよ、ちよと待って! ごめん聞いてにゃかったー!」

彼女は『キャラメルシュシュ』ちゃん、おしゃれでハイソぶってるけど、本当はとろろり甘々の優しい女の子!

「ーつと、いうわけなのよお」

「なるほどなるほど、って私がエッチにゃこと関係にゃいじにゃい!」

「あつ、認めた!」

「認めてにゃい!」

「んっ、んん! で? つまりあんたは、人気にゃいからここには居れにゃい、そう言いたいのか?」

「う、うん」

「はあー馬鹿馬鹿、あんたって本当に馬!」

「違うわあ! 猫よお!」

「何の話よ!? ラブにゃんは一回黙ってて!」

…んっ、んんっ！ いい？ 一回しか言わにやいからよく聞くのよ。確かにあんたは、地味で目立たにやくて映え要素はゼロ。おまけに売れ筋も悪くて若い子からはほぼ買われない。本当にダメにや存在ね。…だけど、それでもー」

パシン！？

「シユシユちゃんの阿保お！ そこは『買ってくれる人がいるんだから自信を持ちにやさい』って言うところですよお！」

「…え？ いやだから今そう言おうとー」

「行きましょつあずきちゃんっ。 あんにや裏切者ブルータス女のことほつときましょお」

「……」

「…つと、いうわけにやのよお、ドーロ君」

「はあ、そりやお前え、杞憂つてやつだよ」

彼は『ロッキードーロ』君、アーモンドにマシユマロと具沢山で、雪解けのロッキー山脈のでこぼこ道のようにオスらしい男の子。ニヤツツが入ってるのでアレルギーの方はご注意下さい！

「…その説明いるか？」

「いるのよお、いいから続けなさい」

「…確かにお前えはレギュラーのくせに、和名で、洒落た片仮名の俺らとは違え（く抹茶もだけど）

『サーティにやん』のロゴが『BR』にやのは創業者二人の名前である『バスキン・ロビンス』が由来だからだ。認知されにくいだろうと『サーティにやん』アイスクリーム』の名前で売り出したが、これは日本独自の愛称で海外じゃあ通じねえ。だからお前え（＋く抹茶）は俺らレギュラーの中じゃ仲間外れで本当に浮いた存在だ。…だがな、それでもー」

ぐちゃあ

「ドーロ君のおたんこなすう！ そこは『同じレギュラー、家族にやんだから絶対どこにも行かせにやい』って言うところですよお！」

「…え？ いやだから今そう言おうとー」

「行きましょつあずきちゃんっ。 あんにや裏切者小早川秀秋男のことはほつときましょお」

「……こ、小早川秀秋は元から男だぞー！」

それから私たちは『く抹茶』ちゃんや他のアイスさんたちに同じように相談した。

「え、く抹茶の説明それで終わりです!? もっとあるですよ! 『猫にやのに熊? パンダです?』とか! く抹茶ももつと書かれたかったです!」

けれども結局私の不安が晴れることはありませんでした。

「ごめんねラブにゃん。もういい、いいんだよ」  
「待つてあずきちゃんっ…あずきちゃん!」

はあ、馬鹿です私。勝手に他の子と比べて落ち込んで、その上みんなにやに心配かけて。人気がにやいことはもうどうしようもにやいのに。…どうせもうここには居られにやいです、居にやくにやるにやら一人でこっそり居にやくにやりました。

「…おい、そんなにやとこで何してるんにや?」

「…シャンプーちゃんは関係にやいです」

「そうだにや、関係にやい、実に関係にやい…が、そんなにや私だからこそ、話せる事もあるのではにやいかにや?」

彼女こそが人気No.1アイス『ポップングシャンプー』ちゃん。チョコミント風味のアイスの中にポップロックキャンディが入っていて、見て楽しい食べて楽しいの誰もが認める生きる伝説アイスです。

「…にやるほどね、事情は分かった。こっち付いて来にやさい、あずき」

…テクテクテク。

「ここは?」

「社長室にや」

「社長!?!」

「静かに! 見つかったら冷凍庫に戻されるにや」

「い、いえっさくです」

「社長! 考え直して下さい! 『小納言あずき』の売り上げは圧倒的最低位、今すぐメニューから降ろすべきです」

「そくうです社長! 『小納言あずき』のためだけにあずきを取り寄せて、採算が採れません。作るのをやめて他のメニューにもつと人を回すべきです!」

「社長!」「社長!」

「…めだ」

「はい?」

「お客様の、お笑顔をお守りするためだ! 君たちこれを見たまえ」

「…、これは!?!」

「そう、お客様からのお便りだ! 『小納言あずきの素朴な優しい甘さがいい』『隠れてるけど実は隠れた名品』『あずきまあまあずき』『飛ぶぞ』」

「少数だがお好いて下さるお客様がいて、逆にこれしかお召し上がらないお客様もおられるのだ。会社のために最善を尽くそうとする君たちの姿勢は素晴らしいものだ。だが、たとえ少数でも、私はお客様の声を大切にしたい。分かってくれるな？」

「二じゃ、じゃぢよー(泣)二」

「うわっ、にやんであずきまで泣いてるにや」

「じゃぢよーめつぢやいい人です。私も付いていきます」

「ダメにや! …まあ、こうにやることは最初から分かってたけど。あずきは確かに、地味で目立たなくくて人気もにやいけど、それでも買ってくれる人がいるんだから、自信を持ちにやさいにや。それに、仮にメニューから降ろされそうにやっても、あずき(十く抹茶)は仲間外れで浮いた存在だけど、同じレギュラー、家族にやんだから、絶対どこにも行かせにやいにや。絶対にやっ!」

「じゃ、じゃんぶーぢやーん!」

「誰にやその集英社が売り出してそうにや奴は! いいから帰るにや、みんなやのところに」

「…はい! ズズツ」

「どこお、どこ行ったのお、私のあずきちゃん」  
「ラブにやーん! ラブにやーん!」

「つあ、あずきちゃんっ! もお、今までどこ行つたのよお! 知らにやい女の匂いにするわよお」

「ジャンプーちゃんのとこです、心配かけてごめんラブにやん、シユシユちゃん、ドーロ君みんなや」

「いや、く抹茶も名前で呼ぶです! いつも思いますがみんなにや何故かく抹茶にだけ冷たいのです!」

「…私もう、絶対どこにも行きません!」  
「スルーです!?!」

「だって、家族のみんなにやが大好きですから!」

「はあ、今日の売り上げも最下位でした」

とある街のとある小さきアイス屋さん。ここでは今日も、私たちアイスは販売中です。

「そんなにやに落ちこまにやいでえ、可愛いお顔が溶けちゃうわあ、あずきちゃん」

「ラブにやん! 大丈夫です、ちゃんと私を買ってくれる人は居るんですから。…あ、来ましたよ、最後のお客様です! それじゃみんなにや、せーのっ

『いらっしやいませ! サーティにやんアイス クリームへようこそ!』